

発表要旨

本発表は二部からなる。

第一部では、作品の背景と内容を紹介する。

南アジア諸国では人を三つの性別で分ける伝統がある。男、女と男女の範疇にはない、現地語では「ヒジュラ」と呼ばれる性である。「ヒジュラ」は、自分の家族をもたない。集団で共同生活を行なう。南アジア社会では、社会の底辺に位置する恥ずべき存在と見られている。現代パキスタンは、南アジア諸国の中で最も早く「ヒジュラ」を承認した国である。すなわち、2009年から「ヒジュラ」を示すIDカードを配布している。ただし、「ヒジュラ」自身は、「ヒジュラ」という蔑称には反対した。そして、「ハワージャ・サラール」(خواجہ سرا)という名称がパキスタンで公認されるようになった。発表者は、2012年から2016年までに、合計8ヶ月間パキスタンで現地調査をした。「ハワージャ・サラール」コミュニティと共同生活を行ない、参与観察による映像作品を作成した。

作品は発表者自身の視点から撮影した。2012年の「ハワージャ・サラール」との最初の出会い、インタビューの拒否がまずあった。その後、2015年から徐々に「ハワージャ・サラール」と交流を深め、コミュニティ・メンバーとして承認されるに至った。この過程で、「ハワージャ・サラール」の日常生活、踊り、乞食行為、集団内部の組織、売春女、新興LGBTのNGOなどとの関係だけでなく、「ハワージャ・サラール」と発表者自身とのつながりも撮影した。

第二部では、研究の意義と映像作品の力について検討する。

調査地であるラホールの歓楽街は、売春の聖地として知られる。外国人の長期滞在は原則禁止である。発表者は、政府から初めて許可をえた研究者として長期滞在し、「ハワージャ・サラール」と共同生活を行なった。そして、パキスタン政府、性的少数者、NGOという三つの側面を知るに至った。本作品は、現代パキスタンの「ハワージャ・サラール」の生活から、パキスタンのLGBT運動と、運動による社会変容に初めて注目したものである。文化や儀礼・価値観と現代の性の解放・個人の自由という矛盾に対して、人はどのように反応するかを探究する。植民地時代のインドでは、「ハワージャ・サラール」である宦官と「ヒジュラ」の運命は、当時の慣習法により決定されていた。現在、西洋人権思想が普及するにつれ、LGBTの動向がパキスタン社会に影響を与えてきている。「ハワージャ・サラール」という独自の文化が保持されるか、変化していくか、今後も観察するべきである。

今回、作品を編集する過程で、今まで見逃していた点にも気づいた。人々の微妙な人間関係や心理状態が、映像によって伝わりやすくなっているように思われた。

映像作品は *Fragment*、日本語で「断片」とした。理由は、発表者には映像を作品化する意図が本来はなかったからである。映像は、すべて論文執筆のための参考資料であった。作品には、発表者自身の声や行動だけでなく、「ハワージャ・サラール」自らの視点で撮影された部分もある。断片のような撮影に、彼らの生活実態が現れている。調査者と被調査者双方の視点が含まれている。撮影する研究者自身が、当事者にもなる可能性についても、考察する必要があると思われる。